

## 受賞スピーチ全文

フランス国立東洋言語文化大学日本語・日本文化学部・大学院

代表 フランソワ・マセ教授

フランス国立東洋言語文化大学の日本語・日本文化学部・大学院の代表で、フランソワ・マセと申します。平成 24 年度国際交流基金賞をいただきました事を、私たちは大変光栄に存じております。最初に、国際交流基金と我学部の間には古くてしかも強い絆があることを申し上げたいと思います。

我学部の歴史を簡単にさかのぼりますために、先ず私の先生で、その後同僚になりました二人の非凡な人物の事をお話したいと思います。1983 年、日本古典文学の翻訳で世界的に有名になった故シフェール教授は、この年の国際交流基金賞を受賞しました。シフェール教授はその時の授賞式のことを後に私に詳しく語られました。1988 年の賞は、藤森文吉教授と共に、私たちの学部が大きく飛躍する中心人物となられた故オリガス教授が受賞されました。

1862 年(文久2年)の当大学の日本語講座の初設以来 1969 年まで、各学年度には一人の常勤教官しかおりませんでした。学生も十人位の小人数でした。70年代の飛躍で登録学生の人数は急速に増加しましたが、教官の人数はそれに応じて増えることはありませんでした。その当時も今も、フランスの大学、特に勉強される機会が少ないいわゆる珍しい言語を教育する学部には、常時資金が足りないという苦しい現実があります。こうした状況のなかで、国際交流基金の教育資料の寄贈プログラムは私達にとり、貴重な援助でした。同時に国際交流基金のフェローシップ・プログラムのおかげで、私を含めて我学部の数人の教官が日本で各自の個人研究を深める機会をもちました。今年も私達の学部はこの恩恵を受けた学生がおります。

これまで教育と研究の問題を同時にお話したのは偶然ではありません。というのは、私たちの学部の特徴の一つですが、我学部では、日本語と日本文化の教育課程は分離されておられません。大分以前のことになりますが、私の学生時代、哲学者の森有正先生は日本思想史の講義以外に、作文なども教えられました。また、最近でも、明治文学のすぐれた専門家であられたオリガス教授は、最後まで一年生に日本語の基礎を教えられました。今年度も、例えば法学専門の助教授が、日本の法律と同時に日本語の語彙論を教えます。

もう一つの特徴は、我学部の日本文化についての講義の多様性であります。学部の教官のなかには考古学、古代、近世、近代の歴史、美術史、映画、思想史、宗教、民族学、音楽、法律、社会、経済、国際関係、そしてもちろん、古代、近代、現代文学の専門家がいます。

国際化が進み、世界化が日常生活のなかで感じられる現在、私たちの学部は幸いに孤立し

てはおりません。実際に日仏交流のレベルでは、70年代以降、我学部と多数の日本の大学との間に交換協定が結ばれました。そのおかげで、日本に留学できる学生の数は順調に増え続けています。また、11日の講演会の会場である日仏会館の現所長クリストフ・マルケ氏は、我学部の教授で私の同僚でもあります。また他方で、フランス、特にパリには、コラージュ・ド・フランス、フランス高等研究実習院、フランス社会科学高等研究院、パリ第七大学などのすぐれた日本研究機関があります。こうした環境の刺激を受けて、私たちの学部のレベルは今後も向上し続けていくことを私達は確信しております。